

リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2007 in 芦屋 ご支援・ご協力ありがとうございました!



日時：2007年9月15日13時～16日13時
(24時間での開催は日本初!)

会場：兵庫県、芦屋市総合公園

来場者数：延べ4,000人以上

チーム数：78チーム

遠隔地ルミナリエ参加者数：90人

サテライト参加者数：鹿児島200人、早稲田40人

スタッフ(RFL関西実行委員会)数：130人以上

ボランティア数：300人以上

ステージ出演者数：240人以上

マスメディア関係者数：200人

協賛企業数：40社以上

協力団体数：76団体

【収支報告】

リレー・フォー・ライフ関西実行委員会

<収入>	
協賛 企業寄付	4,460,000
個人寄付	3,076,070
(開催日の寄付・屋台収入1,612,356を含む)	
収入合計	7,536,070
<支出>	
大会運営費(小計1)	
事務局費	469,742
企画関係費	546,862
製作物費	2,679,332
会場借用費	257,640
会場設営費	194,421
ステージ演出・音響費	1,020,720
会場サイン費(看板、表示板他)	200,000
ルミナリエ費	213,023
食料費	621,000
諸経費(小計2)	
傷害保険	152,920
雑費(郵送料、国際対がん連合へ1%拠出他)	404,603
日本対がん協会へ寄付(小計3)	
支出合計(小計1～3計)	7,536,070

皆様から頂戴した寄付金を元に、財団法人日本対がん協会に775,807円寄付させて頂きました。財団法人日本対がん協会では、がん患者支援活動に使用させて頂く予定です。皆様のご厚意に、実行委員会スタッフ一同、心より感謝申し上げます。

リレー・フォー・ライフ芦屋御礼

リレー・フォー・ライフ関西実行委員会

9月15日13時にスタートした「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2007 in 芦屋」は30℃を超える暑さの中、約4,000名の来場者に恵まれました。共催の、「芦屋市民まつり協議会」「芦屋市商工会」の皆様、協力くださいました「芦屋市各種団体」「陸上自衛隊第3師団」の皆様には心から感謝いたします。芦屋市の皆様、全国からさまざまな形でご協力くださった皆様にこの場をお借りして深くお礼を申し上げます。私たち「リレー・フォー・ライフ関西実行委員会」は今後もこのイベントを継続し、がんと向き合う全ての人たちに勇気と希望を伝えていけたらと願っています。本当にありがとうございました。



リレー・フォー・ライフ関西実行委員会は、活動に賛同いただいた皆様からの協賛金によって運営されております。来年以降の継続的な運営のためにも、より多くの皆様からの寄付を受付しております。<<お振込先>>郵便振替口座：00970-0-319325 リレーフォーライフ関西実行委員会(※振込み手数料はご負担ください。)

リレー・フォー・ライフ関西実行委員会：Tel 0797-57-0007 ホームページ：http://rfl-jp.net/hp/ashiya/2007/



命のリレー、兵庫・芦屋で開催

「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2007 in 芦屋」(主催・日本対がん協会、リレー・フォー・ライフ関西実行委員会)が9月15、

16日の両日、日本初の24時間イベントとして兵庫県芦屋市の総合公園陸上競技場で開かれた。最高気温が32度を超え

る暑さの中、昨秋、茨城県つくば市で開催された第一回の約1000人を大幅に上回る参加者があり、15日午後7時からはNHKの

ETV特集でも生中継され、がん患者支援のイベントとして大きな盛り上がりを見せた。



リレー・フォー・ライフ芦屋

兵庫県芦屋市の総合公園のステージでは多彩な催しを実施された。最初に登場したのは芦屋市海岸通りにできた海岸町に誕生した仲良しバンドのAshiya Seaside Story(写真左)。この後、Reika Sistersなど地元のグループが次々に登場して参加者の大きな拍手を浴びた。

子供たちが目を輝かせたのはボランティアによる絵本の読み聞かせ(写真下右)。夜に入ると、周回コースや芝生の壁面にルミナリエのろうそくが点灯され、がんで亡くなった方々に黙とうを捧げた後、リレー・ウォークの参加者らが静かに歩き続けた(写真下左)。



リレー・フォー・ライフ奮闘記

大隅憲治 関西実行委員会統括リーダー

リレー・フォー・ライフ（命のリレー）。がん患者・家族だけでなく、一般市民が広く集い、昼夜を通じてリレーして歩くことで、社会全体でがんと向き合う連帯感を育もうというチャリティ・イベントだ。9月16日、前日から24時間続いたリレー・フォー・ライフ芦屋のフィナーレでは、会場全体が一体となって感動し、涙しながら抱き合う光景が見られた。患者・家族・一般市民の想いがひとつになった瞬間だった。

私がリレー・フォー・ライフに出会ったのは、妻を亡くして半年になる昨年7月のことだった。妻はスキルス胃癌で亡くなった。享年37歳。支えて下さった周囲への感謝の気持ちを残して旅立っていった。残された私は、喪失感と無力感から引きこもる日々だったが、妻が残した感謝の気持ちを行動で表したいと考えた頃、つくば市で日本初のリレー・フォー・ライフが開かれることを知り、ボランティア・スタッフとして参加した。

右も左も分からずに参加したリレー・フォー・ライフ。心の底では、癌なんてもうたくさんだと思う自分がいる。けれど、癌から目を背けられない。癌と闘った日々は、私たち夫婦が生き抜いた日々でもあったからだ。そんな複雑な心境で飛び込んだ私を迎えてくれたのは、とても温かく、それだけで命というものと真摯に向き合う人々だった。

初対面の人でもすぐに打

ち解けるやさしい空間。一周歩くごとに明るく元気になる人たち。みんなこの日を楽しみに体調を整え、出会えた奇跡を喜び、再会を約束して帰っていく…そんな人達との出会いに癒されていく中、私自身が、前を向いて歩いていく勇気をもらっていた。

関西に戻り、リレー・フォー・ライフという素晴らしいイベントがあることを周囲に話し、いつの間にか100人以上の人が集まった。関西でもリレー・フォー・ライフをやってみよう！ワイワイガヤガヤと楽しい打ち合わせ。けれど、癌を何とかしたい、生きていく希望や勇気を分かち合いたい、という根っこの想いは共通だ。楽しい打ち合わせの一方で、涙ながらに語り合う日々。私は、リレー・フォー・ライフを開催したいと思う一方、この仲間といつまでも一緒に過ごしたいと思うようになっていた。

困難もたくさんあった。でも、熱意が通じたのか、素人集団の危なさを見かねたのか、だんだんと手伝って下さる方が増えてきた。地元の方、ボランティアの方、行政の方、企業の方、メディアの方…数え切れない方々が、リレー・フォー・ライフを応援して下さるようになっていた。準備は本当に大変だった。取り交わす電子メールはピーク時には一日200通を超えていた。最初は月に一回程度だったミーティングも、追いつめられた時期、毎週末はも

ちろん、平日にも開かれるようになっていた。

そうして、迎えた本番。参加者の想いに、自分達の想いを重ね、全国の仲間と勇気を分かち合い、がんに関心の薄かった人たちに想いを伝える日がやってきた。会場には、予想をはるかに上回る、延べ4千人もの方がご来場下さっていた。

最初の一週はサバイバーウォーク。今日まで精一杯生き抜いてこられた方々の晴れやかな顔が見える。続いて、各チームのリレー・ウォーク。チームフラッグは団結の証だ。想いを込めて黙々と歩く方。にこやかに語り合う方。ステージでは、病院を抜け出してこられた方が命の歌を熱唱し、テントでは、サバイバーが子供達へと命の絵本を読み聞かせている。ルミナリエ。2000個のキャンドルに、がんに斃れた方を偲び、がんと闘う方を応援するメッセージが書かれている。「HOPE」というキャンドル文字に込められた祈り…キャンドルラン。市民ランナーが夜を徹してタスキをつなぐ。これまで癌と関わりで応援して下さる。そう、リレー・フォー・ライフが、一人の医師が走ることから始まったように。テレビを見て、寄付だけでもと深夜に駆けつけて下さった方もいる。夜を徹して語り明かす人、ルミナリエに込められた祈りを一つ一つ刻み込む人、それぞれの夜が更け…そして、朝。ランナーからサバイバーへとタスキ



が戻され、お昼には24時間に渡るイベントがフィナーレを迎える。

24時間は長かった。厳しい日差しに照らされ、風雨にも晒された。けれども、ルミナリエの灯が消える頃、輝かしい夜明けが待っていた。24時間は短かった。まるで人生の喜怒哀楽を凝縮したような濃密な一日だった。そんな24時間を過ごした会場の人たちは、不思議な感動に包まれて、抱き合って涙を流していた。リレー・フォー・ライフ芦屋は大きな感動を伝えて終わった。これほどまでに感動が大きかったのは、たくさんの方の想いが込められた手作りイベントだったからだ。

リレー・フォー・ライフは一回で終わるイベントではない。込められた沢山の想いを、次のリレー・フォー・ライフへとリレーし、全国へと輪を広げていくことが大切だ。その輪が広がることで、患者・家族が勇気と希望を分かち合い、健常者との連帯が得られるはずだ。その積み重ねが、社会全体でがんと向き合う機運を高め、いつの日か、がんで苦しまなくてもすむ世の中になるよう願っている。

サバイバートーク

15日午後4時過ぎからは「サバイバートークショー」が行われた。司会は卵巣がんの片木美穂さん。サバイバーとして出演したのは肺がんの三浦秀昭さん、膀胱がんを経験したトライアスロンが趣味の鉄人28号@藤浦さん、上咽頭がんの星野舞さん(写真、左から)。

出席者がそれぞれのがん体験を話し、三浦さんは

03年4月、妻と両親とともに告知を受けたが、3か月ほどは「うつ状態」になり、ほかのことは考えられなかった、と話した。鉄人さんは11年前に膀胱がんの告知を受けたが、マイホームを建てたばかりの時期。負けるわけにはいかない、がんに勝つてやるぞと気分が落ち込むことはなかったが、副作用には苦しんだと

明かした。舞さんは去年3月にがんと分かったが、最初はピンと来なかった。だが、運命は決まっている、ケセラセラでなるようにしかならない、やれることをやろうとパソコンを病室に持ち込んだ、と経験を話した。

「ネットで病気のことを調べれば調べるほど落ち込んだが、調べていくと闘病記に突き当たる。小説を読む人がたくさんいることに感動した」と三浦さん。「入

院すると見舞いに来る人がみな頑張ってくれという。だが、一人だけ『負けたらあかん』と言ってくれた友達がいて、うれしかった」と鉄人さん。舞さんは「入院は4人部屋だったが、病気にならないと出会えない素晴らしい人と会った。Mixiの癌でもいいじゃんのチームの人ともきょういっばい会えた」と、リレー・フォー・ライフでの出会いをたたえた。

三浦さんはセカンドオピニオンの取り方について、「先輩から、1人から聞いた話を信じるな、3人から4人の意見を聞けとアドバイスされていた。しつこく聞くなかで医師とのコミュニケーションもできるようになった」と明かした。

鉄人さんは「もし医師の意見が一致しなければ、別の意見を聞いた方がいい」。舞さんは「今の主治医を信頼しているが最初はなかなか言えないこともあった」と明かした。



多彩な催しに共感の輪

「リレー・フォー・ライフ2007 in 芦屋」は和太鼓のパフォーマンスでにぎやかに幕開けた。山中健・芦屋市長は「がん患者との交流を芦屋から発信したい」とあいさつ。広瀬幸雄・対がん協会理事長は「日本初の24時間継続のリレー・フォー・ライフが実施されるのは大変意義深い」と述べた。次いで俵萌子・がん患者団体支援機構理事長が「昨年、サバイバーの一人としてつくばに参加した。これまで自分ががんを患ったことに格別の感

想はなかったが、つくばで、体の中から突き抜けるような喜びを感じた。素敵なルミナリエもあるので是非、夜まで残って」と呼びかけた。

午後1時半、紫の大横断幕を先頭にごん患者やがん体験者によるサバイバーウォークがスタート、割れるような拍手の中をさまざまなグループが後に続いた。

夜に入って、亡くなったがん患者を偲び、がんと闘う多くの患者と思いを共有するルミナリエが始まり、芝生上や周囲コースのキャ



ンドルが次々に点灯された。

午後9時からはウルトラマラソンがスタート、1周668メートルの陸上競技場外周コースを翌日午前9時までの12時間に多い人は150周以上もし、100人近くが朝まで走り抜いた。

16日午後零時半からはエンディングセレモニー(写真)が始まった。ステージを埋め尽くした参加者が日本初の24時間継続のリレー・フォー・ライフを成功させた喜びをかみしめた。